

夕映えに立ちて

尾崎喜八詩文集 7

創文社版

尾崎喜八（おざき・きはち）

1892—1974.

創文社刊行書：「尾崎喜八詩文集全十巻」，「私の衆讃歌」
「夕べの旋律」「その空の下で」「田舎のモーツァルト」訳
書：デュアメル「わが庭の寓話・動物譚と植物誌」，ヘッ
セ「画と随想の本」，パッガール「牧場の本」

尾崎喜八詩文集 7

0395-99070-4226

昭和 34 年 10 月 15 日 第 1 刷発行

昭和 47 年 5 月 25 日 第 5 刷発行

定価 1500円

著作権者 尾 崎 実 子

発行者 久保井 理 津 男

電話 (263) 7101(代) 振替 東京 92472

発行所 株式会社 創 文 社

〒102 東京都千代田区一番町17-3

落丁・乱丁本は取替えます

堀内印刷・橋本製本

目

次

詩人	三
雙眼鏡	一六
クリスマスへの道	二四
笛	三
或る回想	六
祖父の日	四
夏と冬の素描	五
胡桃の木の下で	五
焚火	五
氷の下之歌	六
復活祭	六
帰京	六
静かな時間の三部作	七
秋とルオー	七
夕日とデュパルク	七
オルゴールとジューヴ	七

三 一六 二四 三 六 四 五 五 五 六 三 二四 一六 三

季節の短章

八ガ岳を想う

初冬の心

鳥を見る二人の男

しぐれ

冬の庭

自然の中の春の歌

春の告知

五月のたより

晩夏

私の庭

末消ゆるこころの波

よみがえった句

霧ガ峯紀行

木曾の旅から

秋の日記

晩秋

八二

八三

八四

八七

八九

九一

九三

九五

九六

一〇〇

一〇三

一〇六

一一一

一二一

一二三

一二四

一二六

高原の冬の思い出	一六九
折れた白樺	一七九
上高地紀行	一八四
同行三人	一九五
国立自然教育園	一九五
武蔵野晩秋	一九九
皇居に残る「江戸」	二〇三
放送歳時記	二〇八
郭公	二〇八
焚火と霜	二一四
春の田園詩	二一八
リルケについて	二二三
訳詩の思い出	二二三
その詩の一面	二二九
ヘルマン・ヘッセと自然	二三七
後記	二四九

夕映えに立ちて

詩人

詩人。いな、一人の詩人。その心の明暗においても、その精神の風土においても、またその本然の樹形や閱歴においても、他のどんな詩人とも全く異った一人の詩人、私である。

こういう事があった。

その日私は高原の奥の或る開拓部落に、一人の年とった養蜂家をたずねての帰りだった。信州の五月の春はたけなわで、高山の残雪の光も柔かく、青々と澄みわたった大空の海には二つ三つ流水のような雲が浮かび、むらむらと泡立つ若葉の森に明るく響く小鳥の歌と、白い舞鶴草や珊瑚色をした紅一葉草の花。野には赤や樺いろの蓮華躑躅がぎゅと咲いて、ところどころに野花菖蒲や野あやめが、青や紫の花冠を晴れやかに浮かべていた。私は五カ月という永い冬のあいだ待ち望んでいた此の大きな春の自然の中を、健かに酔ったような気持で歩いていた。そして柔かい緑の草のもっとも茂った或る窪地のふちを通ったとき、その中でいっしんに草を食っている一頭の見事な裸馬を見て嘆賞した。

ところで私が我が家の近くまで来たとき、思いもかけず隣村の光枝という娘と出逢ったのは実にその馬のためだった。娘は向うの山麓の古い農家の次女で、年は二十歳、若い朴の木のようにすらりとして色が白く、生気に輝く美貌に黒耀石のような眸の涼しさ。おまけに伶俐で働き者で、男まさりの信濃乙女の、その典型と言ってもいいほどである。

彼女は代掻きの田圃から逃げだした馬を捜し求めてこの茫々たる高原の春の野道を来たのだった。私はたった今それらしい放れ馬を見たことを話して、場所を教えるために一緒にいて行つた。すると運よく馬はさっきの窪地で相変らず熱心に草を食っていた。光枝はそ知らぬ顔をして近づいて行くと、いきなりその銜を引摺んだ。そしてつやつやと栗色に光る平首を抱きかかえるようにして千切れた手綱を手ばやく結んだ。それから私に幾度も礼を言いながら、この馬はよく働いて性質もいたっておとなしいのだが、どういふものかこの頃は気が落ちつかなくなつてよく逃げ出して困るというようなことを話してくれた。暫く一緒に歩いた私たちはやがてめいめいの分れ道へ来た。すると娘は「では先生、さようなら。そのうちにまた遊びにおいでなしてね」と言いながら、鞍も鎧もない馬の背にひらりと乗り跨がると、真赤な紐をしっかりとあごに結んだ鍔広の麦藁帽子の下から濡れ光ったきれいな目を見せ、紺の手甲に包んだ白い片手を上げて振り返り振り返り、若草の中に躑躅の花の燃える野を、ワルキューレの娘のように飛ばして行った。

私がこの話をほぼこのとおりに語ったとき、一人の若い詩人がニューアンスのある微笑を湛えて言った、「要するにあなたの詩ですね」と。しかしその微笑はむしろ憫笑のように見えたから、彼はもっと率直にこう言ったほうがよかったのである、「それは自然や田舎や、無智なもの幼稚

なものを単純に礼讃する君の詩だ。しかし断じて新らしい題材と知性の節度と巧緻とを欲するわ、れ、わ、れ、のものではない！」と。

詩とは本来、詩人のおのれに対する願望であり、叫びであり、夢であり、微笑である。その成立は詩人その人の渾沌とした、始源的な、神聖にして無垢な魂の衝動に由来する。それは新古を論ずる余地のないもので、流派とか、時世の好尚とか、審美的評価のその日その日の相場とかには全く無関係である。それは「価無き珠」であり、これを衡ることのできる秤は魂を洞察する魂のみである。この魂は自然の中に、また幼いものの中に、母岩の美とその力と、無尽蔵の鉱脈と、独創と、常に新たな魅力と、さらにおのれ自身の由って来ったふるさとのイメージとを見る。一シーズンを予定して図案され生産される流行家具や文房具のような詩を、魂の消息を重視する魂はほとんど見向きもしないであろう。

だが或る歳の暮のたそがれどき、私は久々に一週間あまりを過ごして来た東京を五十里のうしろに、高原の小さい停車場から森の我が家への小径をたどっていた。降服後二年目の首都は、もはや私に対して親しみも見せなければ慰めも与えない単に名のみの故郷だった。私はかしこでの苦しい出をその糟まで分析しながら、しかしもう二度とみずから進んで帰って行く日の無いだろうことを思えば、雄々しくされた心はむしろ勇み、今後の仕事や生活にむかって深く静かに燃えるのだった。それは信州の十二月の宵だった。空気は凜々と氷り、早くも霜を結びはじめた一望の野の果てに八ガ岳の連峯がくろくろと横たわっていた。おりから満月が昇って連峯の菌形を匂わせ、路傍の藪や枯草の上のこまかい霜の結晶をきらめかせた。すると向うから頬被りをした

二つの人影が近づいて来た。年とった農夫と若い娘、たぶん親子連れの二人だった。それが私と擦れ違いながら「お疲れでございます」と挨拶した。東京附近の「今晚は」に当って、しかももつといたわりの意味と調べとを奏でて、生きる一日の終る夕べの挨拶である。私も「お疲れです」と言葉を返しながら、振り返って彼らの後ろ姿をじっと見た。連峯を離れたばかりの満月が彼ら二人を横から照らし、寒気と霜とがぎしりと彼らを囲んでいた。このたそがれのこの姿、この自然の風景には、まさに古代の美と悲哀と厳肅とがあった。烈しい愛情に胸はふくらみ、不覚の涙が突き上げて来て、私は彼らを抱きしめたかった……

こういう私に再びあのエミール・ヴェルアーランへの遠い昔の思慕と熱情とが（しかし今はもっと静かな、もっと痛切な、もっと充実した、そしてもっと深い感謝にくゆったものとして）よみがえって来る。麦が波打ち、薄碧い亜麻の花の咲きつづくフランドルの野から、北方の変化常なき空を漫々と映すエスコオの岸辺から、あの率直と清廉と善意と歓待との大いなる詩人の、父らしい声が呼んでいる気がする。私は帰るのだ。六十年の迷いの道を経めぐった末に、傷つき虫ばまれながら熟した心、或る処では暗く狭く、或る処では明るく広い不整な年輪、結局は未生以前の草案どおりに成り成った運命をひっさげて、ついのふるさとへと帰って行くのだ。「我ら人みななべて迷う。ただおのおの異なるさまに迷うのみ」というベートーヴェンの言葉こそ慰めだ。一冊の仏英辞書と英語で書かれた文典とをたよりに、「フランドル風物詩」の第三卷「平野」^{フランドル}の、あの沈痛で力強く輝かしい序詩から読みはじめたときの幼い敬虔な胸のときめき！ それを

三十年後の今日思いおこすことがなんと痛切になつかしいか。私は二十九だった。それまでには既に幾らかの仕事はしていたが、詩を書くことには全く初心の私に、エミール・ヴェルアーランの名と人と、その独特な詩風とを知らしめたのが実に高村光太郎さんだった。九つ年上の高村さんもその頃はまだ若く、人も知るあの古い自画像に見るように、脂気を抜いた房々した髪の毛と、少し長めの白皙の顔と、黒い厚い鼻下の髭と、その下の思いがけないギャランス・フォンセの唇の色。書き上げたばかりの詩を持参して恐るおそる見てもらうと、アトリエの隅の造りつけの腰掛へ端然とすわって、いつでも極まって「是はいいよ」とか「悪くないよ、君」とか言って励ましながら、かつて一度も師や先輩らしい指導も添削もなかった高村さん。その高村さんから駒込林町の高台に郭公の遠音の霞む五月の或る日、近郊では麦の穂が伸び、あのアトリエの大窓の下にも蔓薔薇の白い花が盛りの日、「波打つ表」^{プレム・ムワヅ}という詩集の中の「田舎の対話」^{ディアフワッ・リュステイツ}の一篇を、すこし鼻へかかった響のいいフランス語で読んで聴かせてもらったときには、この種の詩のみが人間に与え得る発奮と陶酔と身ぶるいとを、私は禁じることができなかった。

図 丁

この果樹園へ来て私たちの所に足を停める前に、
君は一体どんな遠くを歩いて来たのか、牧者君。

牧 者

茨や棘に掻き裂かれる道をとって、

不毛のカンピーヌの紫けむるあの地方で、

私は永い幾月を暮らし、羊の番をしたものだ。

さては又向うのほうフランドルで、流れの岸の……

こういう詩句ではじまる園丁と牧者との驚嘆すべき「田舎の対話」を、その日高村さんは私のために読んでくれたのだが、ついこの頃の或る夜、北アルプスの空へ晩く沈んでゆく金星の光を新緑の木の間に眺める窓の下でジイドのヴェルアーラン追悼の講演というのを読んでいると、そのとき彼ジイドもまた「対話」の数節を朗読した後で、次のような素晴らしい証言をしている箇所へぶつかった――

「ヴェルアーランのこの作品を再読して、私はその特質を考へてみます。そして私を感じますことは、これが他の如何なる作品にもまして、倦くことのない、並々ならぬ共感に貫かれてあるといふことであります。さうです、これこそこの偉大な作家の最も顕著な特質であると私は信じます。歓迎――彼の前に現はれるものを何でも歓迎迎へること。一つの抑へがたい衝動が、たえず彼を自己の外に曳きずって行きました。個人的な利害、保身、用心深さ、いかなる顧慮も彼を止めはしませんでした。彼は何一つ拒みませんでした。彼と面識のあった人々は、常に手をさしのべ、腕を開き、万人をその抱擁に包まんばかりに身構へてゐる彼を見たものです。

彼の目ざしは他人にも均しく清廉を、真情を、そして率直さを強ひてゐるやうに見えました。彼のそばにゐると、人々は仮面を脱ぎすて、子供に立ちかへつて、自分の影を恥ぢました。彼のそばにゐると、みな自分が善良になるのを意識したものです」(新潮社版アンドレ・ジイド全集第
十四卷中、鈴木健郎氏訳)

善意と歓待の衝動の前には個人的な利害も、保身も、用心深さも、一切の顧慮をも抛つことのできた人、その本人ヴェルアーラン自身もあの限りなく美しい生の讃歌「我が家のまわり」の詩の最後で言っているように、「陶醉し、熱狂し、荒々しく、喜び、また啜り泣いて、突然倒れる溝のふちの草」であつた人間。私は実にそういう真情の人でありたかつたし、また本来そう生れついていたようにも思われる。ところがまたそれだけに理性に欠け、さらに一面全く廉潔でもあり得なかつた私は、いくたびか迷い、過ち、愚行を重ねて、いま生涯の終りに近くようやく目ざめ、善良な心のあることがれ、清明な魂のふるさとを、道の往手の間近かの空に望み得たのである。しかしこうした私にとって、此処にただ一つ慰めとなる考えは、愚昧と不徳と自己苛責との道を遍歴してついにその故郷へ帰り着いた者と、初めから賢く、迷いもなく、常に巧みに世に処してずっとその故郷にとどまっていた者との間には、人間や世界へのその愛の切実さにおいて、それらのものへの信頼の深さにおいて、恐らくはそこに或る逕庭が存するだろうということである。

「あらゆる羈絆をのがれて、何とはなく、より高い理想の人間社会に没入すると称する人々は、

現実的な意義のない、無価値な、抽象の作品を生んでをります」(同前鈴木氏訳)

その夜ジイドの「ヴェルアーラン追悼」にこの結びの一句を読んだ後、私は夜風にそよぐ新緑の森に、お、お、このはずくの二音符の歌を聴きながら安らかな眠りに落ちたのであった。

私は信州のいわゆる富士見高原に住んでいる。終戦後二年目にここへ来たのだからもう足掛け六年になる。東京で人並に家財を焼かれて住むに家もなくなった私としては、疎開後の居据わりではなくて移住である。最初の二年間はこれも身をもってあの業火をのがれ出た娘夫婦と一緒に暮らした。そして今は妻と二人ぐらし。赤松と白樺とはん、の、き、との森の中、或る古い別荘の一隅に竈の煙を上げている。

家の中から樹々を透かして富士が見える。赤石や釜無の連山が見え、霧が峯とその左に遠く槍や穂高の北アルプスが見える。言うまでもなく八ガ岳は、その主峯赤岳をまんなかに、蜿蜒として森の梢とすれすれに見える。

旧火山八ガ岳の広大な裾野と水成岩山地釜無山脈の崖錐面とが接触して、天竜川と富士川との分水界を形作っているこの一帯の大起伏の原野を、簡単に「高原」と言ってしまうのは、いかに白樺がそよぎ鈴蘭が薫ろうとも、厳密に地学上から見れば当たらないこと勿論である。しかし四方の山々の背後からさらさらと雲の湧き立つ梅雨の晴れ間、あるいは茫々とした薄の原に碧い竜胆りんどうの点々と咲く秋晴れの日に、海拔千メートルの高地の草に身をたおして仰向けになり、爽やかな